
MAGIC SCHOOL

永羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAGIC SCHOOL

【Nコード】

N6291C

【作者名】

永羅

【あらすじ】

女男の海菜。どんどん黒くなっていく海菜の双子の弟、香奈。海菜、香奈の幼馴染（腐れ縁）の恵美。海菜に恋をしているホモの祐樹。怪しい実験室を持ち、海菜や香奈に遊ぶ校長こと海菜の母城菜。海菜を苛めるのが趣味の海菜の姉、鈴菜。おかしな人ばかりで毎日騒動の耐えないこの学校。はたして今日は何が起こるのでしょうか？

第一話 いきなり転校…ですか!?(前書き)

初めて書いたので、おかしいところが多いかもしれませんが、どうか暖かく見守っててください・・・ね？

第一話 いきなり転校…ですか!?

「あゝ何でこんなことになったんだろ……………」

とある田舎の駅…

僕は不安を抱えつつ、駅を飛び出した

僕は白川海菜^{しらかわうみな}

よく女に間違えられるけど一応男です…

この名前に少し長い髪、少し華奢な体、小さな身長に少し高めの声・・・ぽつと見、男だと思う人はまずいないだろう
後、童顔だともよく言われます…

かなりの女顔なんで（苦笑）

あまりにも周りが女扱いするので自分でも結構自覚しております

いつの間にか僕の愛好会が作られててその半数以上は男子だったってこともあったもんだ

はつきり言ってかなり憂鬱です…

どう考えても女のような名前なのは、母さんが生まれるなら女の子がいいと思っていたから・・・らしい
生まれたのは男の子だったけど、やっぱりどうしても女の子がよかったのか、ピアノとかバイオリンとか習わされるうえ、挙句の果てには女装させられたり…

様になっていた自分が嫌だ……

ああ……思い出していたら涙が出てきたよ……

まあ母さんは6年ほど前によくわかんない置手紙を残してどっか行っちゃったんだよね

あの時はほんとに救われたな

で、これから行くところは高校で……

なんだかもう意味わかんないし……………

あの馬鹿親……ふざけんなよな……！！

[illegible]

新学期

僕は、高校2年生になっていつものように学校に行く……はずだった

そう、父さんからあんなことが言われなければ……

「^?」

いきなりの発言に、僕は驚いて聞き返した。しかし、やはり帰ってくる言葉は同じだった。「だから、転校しろと言ってるんだよ」

「何？急に： 大体何で僕が転校しないといけないのさ！」

「海菜：お願いだから理由は聞かないでくれ！」

「はぁ？」

父さんがいきなり意味のわからないことを言ったために、僕の頭は混乱していた

なんでいきなり転校しろなんて： しかも新学期の前日に言うか？
普通

大体いきなり転校しろってそんな理不尽な：

「あ、もう入学届けと退学届けは出しておいたから心配すんな」

「っていつの間に！？」

くっ： わかったよ！！行けばいい

いんでしょ！！」

駄目とは言わせないだろうし：言っても無駄だろうと思ったので、仕方なく行くことにした

というか入学届けとか本人の許可無しに出すなよな：

「さっすが海菜♪ 物分りがいいね」 じゃ、一応地図渡しとくよ」

その瞬間、僕の中で何か切れた：ような気がした

死ねばいいのに： 本気でそう思った

「父さん：こんなこと言ったからにはどうなるかわかってるよね？」
冷静に：冷たく僕は言った

「え？ちよつと… 海菜？」

「じゃ、殺るよ♪」

「うわああああ!!」

僕は、満面の笑みを浮かべてそう言い放つと同時に、父さんを半殺しにした

(この間わずか0.5秒)

「ふう…♪」

父さんを痛めつけてすっきりした僕はその後、何も考えずに寝ていた

~~~~~

と、これが昨日の出来事である

「つくそ!!何が『物分りがいいね♪』だ!!」

まあ半殺しにしてすっきりしたけど

「大体 おつかいでも頼むようなので転校しろとか言うか？普通」

ほんとおかしな親だよ全く…

「それにしても… なんだか嫌な予感がするんだけど… 大丈夫なのか…?..な?..」

こういう嫌な予感はその大体当たるんだよな

「もうここまで来ちゃったんだし… 嫌な予感なんて知ったこっちゃねえ！」

はい やけくそですけど何か？

でも、この『嫌な予感』は想像を絶するものだった



**第一話 いきなり転校…ですか!?(後書き)**

第一話楽しんでいただけましたか？

できれば感想書いていただけると嬉しいです♪

それと、他の小説と激しく被ってる時は教えてください（できるだけ修正するので）

## 第二話 魔法学校白川学園!?

「何処にあるんだよ…」

僕は、学校が全く見つからずにいらいらしていた  
探し始めて既に10分 そろそろ見つかったもいい頃なのだが…

「父さんの地図は役にたたないし…」

何で役に立たなかったのかというと… ありえないほどに適当な地図だったのだ

「くそ!! こんな落書き!!」

僕はそう言っていると、何かウザかったので、地図を丸めて道端に投げ捨てた

くしゃくしゃになって転がっている地図から目を外したその瞬間、  
ありえない光景が目に入ってきた

「うそ?」

そう呟きたくもなるよ!! こんな光景見せられたら

目の前にあるのはばかりでかい学校…  
普通の寮の5〜7倍くらい大きい  
でも驚くのはそこじゃなかった

東京ドーム形の薄い膜のようなものが学校を包み込んでいる

「何これ…?」

そう言いながらそれに触ると、何故かすり抜けてしまった

「……ほんと何なの?これ? 漫画じゃあるまいし」

1つ疑問を胸に抱きながら、校門の方に歩いた

そこでまたまたおかしなもの…というより文字かな

校門には木の看板のようなものが立てかけられている

「『魔法学校 白川学園』? って…白川!? 何で僕の苗字が?」

呆然としていた僕に、突然1人の教師が話しかけてきた

「君が海菜君?」

「あ はい、そうです!!」

突然の声に少し戸惑ってしまった

声の主はちよつとイケメンの教師 女子にもてそうだ

「そうか!!俺は君の担任の平谷<sup>ひらやいつき</sup>斎 宜しく!! といってもクラスは1つしかないんだけどな…」

「あ、宜しくお願ひします でも何で1つしかクラスがないんですか?こんなに大きい学校なのに… それと、後あの東京ドームみたいな膜?はなんですか?」

僕はさりげなく疑問に思っていることを口にした

「ああ…そのことなら校長に聞いてくれ 嫌でも会いに行くことになるだろうからな」

「はあ……」

僕は返事じゃない返事をした

「他の生徒も待たせていることだし、早く教室に行こう」

そう言って歩き出す先生に僕はついていった

そして、この学校に入った瞬間、破滅のカウントダウンが始まったんだ

## 第二話 魔法学校白川学園！？（後書き）

第二話更新しました！

なんだか ちよつと内容が薄いような気がします・・・

### 第三章 何でいるの??

「ここが教室だ」

先生はそう言って、教室の扉を開いた

「突然だが、今日は転校生が来た　白川海菜君だ」

今入るんだよな…　あゝ緊張する

僕は、少し戸惑って、教室に入った

僕が教室に入った瞬間、歓声が聞こえた

…可愛いとか何だかあんま嬉しくないようなことばっか…

自己紹介しないといけないんだろうな…

まあこうなることはわかってたんだけど

「えっと…白川海菜です　よろしく」

言い終わると、僕は適当に空いている席に座った

僕が座ると、先生はすぐさま授業を始めた

あゝ…授業か めんど

全く授業を聞かないまま休み時間に入った

「海〜〜!!」

休み時間に入ると同時に、背後から声が聞こえた

後ろを振り向くと懐かしい顔…じゃなくて!! なんであいつがここにいんの???

「なっ…恵美!? 何で…」

そこにいたのは中学の時の同級生で幼馴染でもある宮野恵美みやのえみ 僕が困っている時に面白がってばかりいる酷いというか薄情というか・  
・ そんな人だ

「何でって私がこの学校に通ってるからに決まってるじゃん」

決まってるじゃんってあんたね… 何でここに通ってるかって聞いてんのになあゝ

「ああ、そうそう 祐樹もいるよ」

そう恵美が言った途端、いきなり寒気がしてきた こういうときって言うのは大抵…

「海菜〜〜〜〜!!!!」

やっぱり… 嫌な声が後ろから聞こえた 僕はその瞬間横に跳んだ

僕の横すれすれに祐樹が突っ込んできた

彼は 佐山祐樹<sup>さやまゆうじゅ</sup> 中学の時に僕に惚れて（嬉しくないけど）付きま  
とってきた

僕からちよつと外れて突進した祐樹は、そのまま机にダイブしていた

「いってゝ… 海菜！！ 酷いぞ！」

「酷いぞじゃないよ！！ 急に抱きつくこうとするな！」

「だって海菜が可愛いから…」

「僕にはそっちの趣味はないの！ 何度も言うように男だし  
同性愛には興味ない！」

「そんな堅いこと言わずに 俺を受け止めて」

そう言うと、祐樹はまた突進してきた

僕は、それをかわして背中にチョップをかました

まあ力はないからあんま痛くないだろうけどね…

「海も相変わらずだね」

恵美が笑いながら言う

ははは… そうですよ！！ 相変わらず男に好かれる女顔ですよ！！



「そうそう この学校は寮になって、 海菜は私と祐樹と同じとこになってるから」

へ？

今さりげなくとんでもないこと言ったよね

「そういうことだから 宜しくな 海菜（はあと）」

祐樹はそう言うと同時に僕に抱きついてきた

「…祐樹？ いいかげん、僕怒るよ」

そう言って、怒りのオーラを出すと、危ないと思ったのか、祐樹はすぐに飛び退いた

「祐樹！ 海菜本気で怒ると大変なことになるからほどほどにしていた方がいいよ」

下手したら… 死ぬよ」

「…祐樹と同じところ！？ 嫌だーーーー！！ 絶対嫌だ！！！」

「そんな照れなくても…」

ヒュ

ドカ

ゲシ

はい 効果音だけでわかんなかったと思うので説明します

祐樹がいいかけた時、僕はまず祐樹の後ろへ高速で回り込み、一応人体の急所の部分を殴り：といっても変なところじゃないのでご安心ください

その後、邪魔なので適当な所に蹴り飛ばしました

「あんま力なくてもいいところに当たれば気絶くらいさせられるってほんとだったんだな〜♪」

「そんな話聞いたこと無いわよ」

そう言ってる間に、授業が始まった

祐樹はというと：

「う〜ん… 海菜〜」

寝ていた

変な夢じゃないといいんだけど：

### 第三章 何でいるの? (後書き)

なんだか変になっちゃったな・・・

もうすぐ校長登場です♪

#### 第四話 校長は…母さん!?

「あゝようやく終わったゝ!!!」

全ての授業が終わってようやく休める…かな？

まあたぶん帰るまで休めないんだろうな… あいつがいるし…

「海菜」

そう思っていた矢先、奴はやってきた

予想はしていたことなので、僕は見事にソレをかわした

「んで、何で君はすぐに僕に飛びついてくるかなゝ…」

「それは海菜があんまりにも可愛 ぐべし」

僕が顔面に蹴りをかますと、祐樹は奇声を上げて倒れていった

「恵美… こいつ何とかなんないかな？」

「別にいんじゃない？ 面白いし」

ああ…こういう奴だった…

「海、それよりさっき校長があんたを連れて来いって言ってたから  
行こうよ」

「ああ、そうなの？ でも何でだろ」

「制服とかじゃない？　ほら、まだ転校したばかりだから海、私服でしょ？」

そう言われればそうだ…　僕以外は皆制服を着ている

そんなことを話している間に、校長室に着いていた

「じゃあ、ここが校長室だから、頑張ってるね」

「え？　ちよっと…　何を頑張んのさ！！　　って答える前に逃げないで~~~~~」

恵美達は意味深なことを言い残して逃げていつてしまった

「あゝ何かかなり不安だな…　嫌な予感たっぷりだ」

そう言って扉に手をかけた瞬間、ある気配が僕を包み込んだ

「な…　まさかこの気配は…　　いや、そんなはずはない！！」

「母さんがここにいるはずは…　　…でも白川学園だよな…　　」

母さんが校長だったら父さんが僕をここに送った理由から学園の名前からして全て辻褄が合う

そう、この気配は6年前になくなった母さんのものだった

「…とにかく、開けるか」

そう言って開けた扉の先には、予想通りの人物が待ち構えていた  
そして、破滅のカウントダウンはついに零をむかえた

「海ちゃん」

その人物は、そう言って弾丸のように飛びついてきた

その速さは祐樹よりも格段上で、僕でも避けることはできなかった

「…母さん？ 1つ聞きたいことがある」

「なあに？ 海ちゃん♪」

「何で貴方はここにいますのしょうか？」

僕は何故か丁重に疑問を問いかけていた

「ああ それは私が校長だからよ♪」

「だから… 何で校長なのかって聞いてんの!!」

「魔術師だから…かな？」

「……………は？」

今当然のようにありえないこと言いましたよね？

「母さん… 何言ってるの？」

…ついに頭がおかしくなったか？

「私の家系は魔術師の家系でね、この校長を務めていたのよ」

「… 初耳なんですが」

というかありえないし！！

その後、母さんは色々説明をしてくれた

母さんの話によると、

魔術師というのは、その家系によって受け継がれていること

その魔術師を育てるのがこの学校だということ

それと、こういう学校は世界にいくつかあるということ

外の結界は、魔力を持たない人が入れないようにするためだということ（そういう人がこの学校に入ったら何か知らないけど混乱が起ころうしい）

と、まあこういうことらしい

なんだかあまり信じられないんだけどね…

というか意味わかんねえ

因みにクラスが1つしか無いのは魔術師の家系は少なくなってきた  
いるからあまり入学する人がいないためらしい……

「というわけなのよ♪ わかった？海ちゃん」

「ああ… 全く信じられないんだけどね」

「それより、何で僕を祐樹と同じ部屋にしたんだよ!!」

「面白いからよ♪」

面白って酷すぎでしょ

「そういえば貴方もそういう人種でしたっけ？」

「それと、制服なんだけどね♪」

「……はいはい… どうせ女子用を着せるんでしょ」

涙ぐんでいる僕を横目にそうよ♪とか言っているし…

…酷すぎる~~~~~ (泣

「ようやく開放されたと思ったのに……」

僕の普通の生活は6年間で終わっちゃったんですか…



「じゃあこれが制服よ♪ 海ちゃんのことだからきつと似合うわよ  
♪」

そう言って渡された紙袋の中にはやっぱりスカートやら何やらが入  
っていた

僕、まじで泣きますよ      もう泣いてるけど…

#### 第四話 校長は…母さん！？（後書き）

最初とかなり設定が変わってしまいました

海菜の母親も困った人の方がいいかな…って考えた挙句、登場させ易いように校長にしちゃいました

できれば感想お願いします

## 第五話 憂鬱だあ…

「はぁ〜……………」

「何でこんなことになったんだか」

僕は何もかも失ったように感じた

「何で祐樹と同じ寮に… というか魔術師って何! ?      そのうえ  
なんで女装なんて… !」

母さん… 僕は貴方を激しく恨みます

そして父さん 何でここに行くのをOKしたんでしょうか?      もう  
一回半殺しに… いや… 次はほんとに殺します

僕が激しい絶望感に覆われていると、2人の人影が見えた

「祐樹!! 先に言うておくが抱きつかないでよ! ?」

「嫌だ」

「……祐樹も半殺しにしといてあげよっか?」

「それも嫌だ」

「じゃあおとなしくしていてね♪」

「……………はい」

僕が激しい怒りと悲しみのオーラを発していることがわかったらしく、祐樹は素直に言うことを聞いてくれた

めずらしいこともあるもんだ

「じゃあまず私達の住む部屋を海に教えないとね」

そう言って恵美は歩き出す      どうやら祐樹と僕のやりとりはもう飽きてきたらしい

「着いたよ」

「へえここが… 結構大きいんだ      まあこの学校の異常なでかさだったら普通…なのかな？」

「あ、一応部屋が分かれているから安心して　まあ流石に鍵まではできないけど」

「まあそれなら少しは安心…だな」

「あ、やっぱ祐樹が乗り込まないためにバリケードでも造ったほうがいいかな？」

「いいけどそこまでできるほどの物は無いよ」

「えええ」

「これで俺は海菜と……」

「祐樹？　また蹴りくらいたいのかな？」

「……………」

「ところで海菜？　この袋は…？」

「……言わないでくれる？　見たいんだったら勝手に見て……………」

「あ、制服だゝ　しかも女子用　これ着た海菜見てみた　ぐは」

はい殴りましたよ　流石に素手ではあんま効かないからその辺にあった壺で（ちよつと高そうだったけど）

「因みに海の部屋は一番奥だよ」

恵美はその後、風呂場やトイレの場所などを簡単に説明してくれた

「早く休もう…… 今日疲れた」

僕はそう言いながら、自分の部屋に行ってまだ夜でもないのに寝てしまった

## 第五話 憂鬱だあ…（後書き）

またまたとってもうっすゝい内容になってしまいました

次こそはちゃんと書きたいです・・・

## 第六話 制服!!

ジリリリリリ

「ん? もう朝…か」

布団から這い上がると、大きく伸びをした

そういえば今日からだよな あの制服着るの…

… 今日私服で出て後でちゃんと男ものの制服もらお  
まあ母さんが妨害するんだろうな…

その後、後の事をなるべく考えないようにして洗面所に向かった

「はあ…朝はやっぱ辛いな…」

そう呟きながら部屋を出て、共同部屋… (リビングって言うのか  
な?) に行った

「あ、恵美 起きてたの?」

そこには恵美の姿があった 祐樹の姿はないことに気づき、ほっ  
と胸を撫で下ろした

朝から抱きつかれたんじゃ困るからな

「ん? ああ海 おはよう」



「まだ祐樹は起きてないんだ… よかった」

「海も朝ごはん買いに行ったら？ 早くしないと食べられなくなっちゃうよ」

恵美は、パンを食べながら言った

「うん わかった じゃあ行ってくる」

僕は、そう言うのとゆっくり部屋を出て売店に向かって歩いていった

「はあ… 危なかった 売り切れ直前かよ」

「海おかえり」 校長がこれ読んどけてよ」

そこにあつたのは魔道書だった…

「…そういえば恵美もその…魔術師？だっけ の家系なの？」

「うん 聞いたのは一昨年…かな？」

「…ってことはやっぱ祐樹もそうなんだ」 …まさか母さんの策略か？ これは」

特に祐樹と同じ部屋にしたこととか…

何でそんなに祐樹にこだわるかって？ …普通だろ

毎回男に抱きつかれて逃げない男がいるか？

「そろそろ時間だよ 服…着替えなくていいの？」  
恵美がくすくす笑いながら言う

「…制服は今日普通のに替えてもらうよ」  
まあ当然でしょ

「男子用のはもう無いっぽいよ？」

な… 予備くらいあってよくないか？

「じゃあ注文を…」

「それが今売り切れだって」

何で~~~~~!!!

どうしてもこの服を着せたいのか 母さん!!

「ああもう私服でいい!! 制服なんて捨てる!」

「あら? 制服を着ないのは校則違反なのよ?」

「… だからって着れるわけないだろこんなの!」

「別にいいじゃない 減るもんじゃないしそれに……」

「それに……?」

「海の女装姿久しぶりに見てみたいな♪」

不気味な笑みを浮かべて、恵美は制服を近づけてきた

ヤバイっ!! 絶対無理やりにでも着せるつもりだ

咄嗟に僕は逃げ出す

恵美は祐樹を起こしてから追いかけてきた

「絶対あんなの着ないからな!!!!!!!!!!!!!!」

そう叫びながら、僕は廊下を走り続けていた

## 第六話 制服!! (後書き)

更新少し遅れました

まだ6話ですね・・・  
もっとかんばります

少し本編を修正しました♪

## 第七話 初魔法成功!!

ドドドドドド

.....

何で祐樹と恵美の2人だったのがいつの間にか全校生徒になつて  
のかな？

「なんて数だ…… これは挟み撃ちにでもされたらひとたまりも  
ないな……」

僕は女装阻止のために走り続けている

いつまで逃げられるかな……

「!!!!!! 母さん!!」

廊下の途中で母さんが待ち伏せをしていた

「そこまでよ海ちゃん♪」

「つく…… こうなれば!!」

僕は魔道書に書いてあることを実行した

~~~~~

魔法の基礎は物質出現魔法である

この魔法にはそれぞれ属性があり、

炎 水 冷氣 雷 風 土 草 毒 光 闇 空 無
の12種類がある

無属性は上級魔法に入り、出現させるのはとても難しい

物質を出現させるには、まずイメージが大事である

それが出現すると念じることによって魔法が成功する

因みに出現したものは術者には基本効果が無いが、魔力を込めれば触れることもできる

~~~~~

僕は、ある物を出現させた

「!! 光線!?!」

僕が出した光線に驚いた母さんは一瞬隙を見せた

その隙を僕は見逃さずに母さんの横を走り抜けた

「よし!! 成功♪」

「つて!?! ~~~~~」

喜んだのも束の間、その先は行き止まりだった

まずい!! 捕まる!!

そう思った瞬間、僕の意識が遠のいていった



## 第七話 初魔法成功!! (後書き)

今回はとても文字数が少なくなってしまいました(汗)  
これから、一日一話以上のペースで原稿していきたいと思います

## 第八話 第二の悲劇

気がついたら、僕は自分の部屋にいた

……そういえば廊下で捕まったんだよな  
ということは……

「やっぱりね……」

鏡を見ると女子用の制服……

俗に言うセーラー服を身にまとった少女…… にしか見えない少年  
がいた

「……………はぁ…」

まあ遅かれ早かれこうなることはわかってたんだけどね…

「ったく……あいつら……」

そう呟いて部屋を出ると、僕をこうさせた張本人がいた

「あ、海起きたー やっぱ可愛いね♪」

「ね♪じゃないよ全く!!」

「ごめんごめん 反省してるから」

「…………にやけ顔で言われても説得力ないんですけど」

「まあまあ そう怒らないで」

「普通怒るよ!!」

「でもクラスの女子より可愛いんじゃない？　これで男なのは勿体無いな…………」

「全然嬉しくないし 逆に傷つく発言だね」

「そうかな？　褒め言葉のつもりなんだけど」

「褒められている気分は微塵もないよ」

「まあそう気にしないで」

「気にするよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「それより もう魔法使えたんだ　　というかいつの間にあの本読んだの？」

「ああ…………… 逃げながら読んでた」

「余裕ありすぎでしょ」

「そう？　本読みながらもほぼ全力疾走と同じくらいの速さで走れたけど」

「凄いを通り越して呆れるわね」

「そう？僕としては恵美の行動の方が呆れるんだけど」

「もう1，2着ほど着せてあげよっか？」

「…………脅迫ですか」

「そういえば授業は？」

「ん？今昼休みだからまだ授業は無いよ」

「そんなに寝てたんだ……………」

「校長特製の麻酔針を使ったからね」

…………… まあ母さんならやりそうだな  
どうせただの針に毒属性の魔法で麻酔薬を作って塗りこんだだけだろうし

「でももうすぐ午後の授業始まるから教室に行った方がいいんじゃない？」

「ほんとだ 早く行こう」

僕は教室に向かって走っていった  
これから第二の悲劇が起こることも知らずに……………



「え…………ちよつと 皆？」

一斉に襲い掛かってきた

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

間一髪でそれを避けて逃げ出す  
当然後ろからは男子が追ってくる

僕は………………

「僕は男だああああ~~~~~!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

その叫びも虚しく、僕は追われ続けていた

## 第八話 第二の悲劇（後書き）

更新 だいぶ遅くなりました（汗

そろそろ新しく出るキャラとかも考えていたりします

いつ登場するかわかりませんが、なるべく近いうちに出したいと思っています

## 第九話 隣町でお買い物♪

「うう~~~~~」

「海 いいかげん泣くの止めたら？」

「だって~~~~」

「それにしても海危なかったわね 私が後少し遅かったら……」

追いかけて逃げ続けたのはいいけど、途中でまたまた行き止まりにはまり、皆が飛び掛ってきた瞬間恵美がやってきて蹴散らしてくれたのだ

「お願いだから言わないでよ 考えたくないんだから」

「それにしてもほんとにクラスの男子に襲われるなんて考えもしなかったわ 海も可愛さに磨きがかかったわね」

「~~~~~」

「ちょっと 海？ あゝ 泣き止むどころか更に泣いちゃったよ」

「でも泣いている海菜も可愛いな」

いつの間にか隣を歩いていた祐樹が言う

「……………！ 祐樹の 馬鹿 ああ……………！

……………」



見事に蹴り（当然魔力込）が祐樹の鳩尾に決まる

（強化したい場所に魔力を込めるとその部分の身体能力が高まるらしい　今の場合足に魔力を込めたから今の蹴りも普通より格段強くなってる）

何か奇声を上げて倒れたけど気にしない

~~~~10分後~~~~

「海　もう大丈夫？」

「……………うん」

「それより……………　今日一回も授業受けてないけど大丈夫かな？」

「いんじゃない？　皆普通に授業抜けてるし」

「いいのかよ！！　何をやってるんだ教師！！」

「それより、授業も終わったことだし隣町に行かない？　ここと違って結構賑わってるわよ」

「へえ　行ってみよっかな」

これから買い物をしたり後バイトもしないと行けないから一応見ていくか

「俺も行く！！」

いつの間に復活した祐樹が言ってきた

……鳩尾に魔力込めて殴ったうえ、麻酔針も一応刺していたのに
何で復活してんの!?

「祐樹……………」

「何だ？」

「ウザイからもう一回眠れ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
「……」
「そう言い放って僕はもう一度気絶させる」

当然麻酔針（3日間は普通の人は起き上がれない威力……………らしい）
を刺すのも忘れずに

「じゃあ行こっか♪」

「うん」

~~~~~隣町~~~~~

「結構近いんだね」

「まあ電車だったしね」

隣町までは電車ですぐだった

「さて どこから行くかな」

「海くっこっちこっち」

いつの間に一つの店の前に恵美は移動していた

「遅いっ！！！！！！！！！」

待つこと既に30分

店に入ったのはいいが、恵美が洋服に夢中なので、別行動をとることに

バイトの情報とかを見て回って待ち合わせに決めた喫茶店で待っていた

ナンパして来るのが多いために振り切るのに時間がかかって、とっくにもう恵美は来ているのかと思っていたが、いないうえに全く来なかった

「お 海 もう来てたの？」

「遅すぎ！！」

「女の子のショッピングは長いのよ」

「……………まあいいや」

色々突っ込みたかったけど何か突っ込む気分が失せたのでスルーすることにした

その後、少し食事をとって駅へと向かう

しかしまたまたナンパが多いこと……

我慢できなくなってナンパしてくる野郎共を片っ端から蹴散らして行く

少々時間がかかるので恵美には先に帰ってもらった

「はぁ……… ようやく片付いたよ」

とりあえず伸びてる奴らを積み重ねて置いておいた

「さて、そろそろ帰るかな」

そう言って駅へと向かう

電車に揺られながら、バイトのことを考えた

「うーん……… 今日一日探したけどなかなかいいところ無いんだな

……… もうそろそろ金も危ういし……… 早く見つけないとな」

なかなか危ない状況なのであった

## 第九話 隣町でお買い物♪（後書き）

次回あたりで新キャラ登場です!!  
期待しててください

## 第十話 再開は突然に

改札を済ませ、駅を後にしようとしたその時

誰かにぶつかった

「「!!」 ごめん（なさい）!!」

見事に声が重なる

ぶつかった相手は僕に瓜二つだった

相手の姿を見て二人とも驚く

数秒、沈黙が二人を包み込む

僕にこんなにそっくりな人は一人しかいない

「まさか……………」 「もしかして……………」

「香奈!？」 「海兄ちゃん!？」

中学に入る少し前に何処かへ行ってしまった僕の弟……………しらか白川  
わかな香奈だった

因みに香奈の名前が女みたいなのも母さんのせいだ

「「どうして此処に!？」」

とりあえず香奈が何で急に消えたのかを聞く

「で、つまり……………あの時は一人暮らしをしに行ったと」

「まあそういうことになるかな」

「……………一人暮らしって中学に入る直前の人がやる行為か？  
大体金はどうやって貯めたんだよ！！それに家は？」

「お金は父さんが送ってくれたし家はアパート かなり安い場所だ  
けあって少しボロかったけどね」

「あの馬鹿親父……………！！僕に内緒で……………」

「それより……………何で海兄ちゃんはおそこにいたの？」

「ああ 隣町に買い物に行った帰り 今ちよつとある寮に住んで  
て……………」

「え？ その寮ってもしかして……………」

「？ まさか香奈も父さんに？」

「僕の場合母さんから手紙が着たけど」

「へえ……………その手紙見せて」

「あ、 うん！」

その手紙には父さんが僕に言ったのと同じようなことと、父さんが

僕にくれた地図と同じものが書いてあった

「香奈もはめようってか……………」

「? 何のこと?」

「……………行けばわかるさ」

「行くなって……………」

「当然 この地図に書いてある場所だよ 父さんに転校しろとか  
言われてね……………」

「へえ やっぱり海兄ちゃんもそうなんだ」

「まあ尤も、僕はもうそこに住んでるわけなんだけどね」

「それよりもさっきから嫌な予感がするんだけど大丈夫なのかな  
あ」

香奈も僕と同じ境遇に遭っている為に、こういう予感は鋭い

「ああ…………… たぶんその予感…………… 外れてないと思うよ」

「え? どういうこと? 何かものすごい不安なんだけど」

「大丈夫 僕がついてるから」

「……………それでも心配だよ——（半泣き）」



「これくらいで泣くなって」

因みに香奈はかなり気が弱いのである

その為に守りたいと言う気持ちが大きいのだが、どうしても力にならない上に巻き添えをくらってしまふというパターンが多い

「ほら 行くよ!! 地獄へ」

「地獄う~~~~~~~~!!?」

あ…

つい本音が

ますます泣き出す香奈

「うわちよつと…………… どうしよう……………」

泣いている香奈を落ち着かせようと頑張る僕であった

## 第十話 再開は突然に（後書き）

双子の弟ということにしちゃいました（笑

何だか海菜と少しキャラがかぶっているような気がするけど気にしない

なかなか面白い設定ではあると思うんですけどね……

## 第十一話 何で香奈を……（前書き）

少し書体等を変えてみました

## 第十一話 何で香奈を……

ようやく香奈を落ち着かせて寮と言う名の地獄へと歩き出す

「さっきから思ってたんだけど」

香奈が口を開く

「？」

「その服装………」

ああ……… 制服のことか

「まさか海兄ちゃん………」

ちよつと香奈……… 何だか視線が痛いよ

「違うって そっちの趣味があるわけじゃなくて………」

「じゃあ何でそんな服着てるの？」

「学校に着けばわかる………」

そう話している間に寮（学校）に着く

ここまでの香奈の視線がかなり痛かったけど………

学校に着いたら、香奈も最初の僕と同じような反応をした

まあ当然だろうな

とりあえず校長室へと連れて行く

周りの人が驚いていたけど気にしない

……… まあ僕とそっくりな香奈といっしょに歩いているんだから当然だな

~~~~~校長室~~~~~

ガラ

扉を開くとやはり母さんがいる

香奈は少し驚いたような納得したような……

結構僕と同じ反応をしていた

「で………母さん!! これはどういうこと?!?!」

「どういふことって 香奈も一応魔術師の血が流れてるから」

「だからって僕と同じような方法で連れてこなくてもいいでしょ!」

この馬鹿親共は~~~~~(怒)

「……はあ それはともかく、せめて香奈にはちゃんとした制服を……」

「それならもう用意してるわよ♪」

袋に入っているのは僕に渡したのと同じ物

「だ〜か〜ら〜!!!!!! 何でそうなるんだよ!!」 男子用

のにしろと言っているの!!」

「それは無理よ」

「何で」

「私が香奈に着せたいから」

「そんな理不尽な……」

「もういいよ 海兄ちゃん」

黙ってやりとりを見ていた香奈が言った

(どう頑張ってもそうするつもりでしょ? あの人のことだし………海兄ちゃんもそうして仕方なくそれを着たんでしょ?)

(まあ僕の場合は母さんだけじゃなくてクラスの皆の策略で無理やり着せられたんだけどね)

「………はあ もういいや……… とにかく母さん 香奈に説明だけでもしてよね」

とりあえず説明をさせる

説明終了

「とりあえずこういうことらしいけど……」

信じられないよね？ 普通」

「海兄ちゃんが一度魔法やって見せてくれたから信じられなくもないよ」

「そっか……」

とりあえず僕の部屋で寝ることになった香奈
その為に二段ベットだったのか……

「そこで普通不審に思うでしょ？」

「！！ 香奈！？ いつの間に読心術を……」

「声に出てた」

あ………

それはともかく！！

「部屋にはホモが一人いるから気をつけろよ 抱きついてくるかもしれないし」

「………そうなの？」

「ああ……… 中学の時に告白されて断ったのに何故か付きまといて来るんだよ 男に本当に告白されるのは初めてだったよ（苦笑）」

「へえ………」

部屋に到着

祐樹と恵美が驚いている

「う……海菜が二人いる………!!?」

「香奈!？」

当然上が祐樹、下が恵美の反応だ

流石に恵美は香奈のことに気づいている様子

「海兄ちゃん………この人が？」

「ああ……さっき言ったホモだ」

とりあえず二人にどういふことか話す

「ということです」

「祐樹!! 香奈に夜這いなんて絶対するなよ!!」

「しないよ 俺は海菜にしか「黙れ」ぐは」

何か変なこと言ってたので踵落としをかます

ついでに魔法で土の塊を出して上に載せておく

「そこまでしなくても………」

「香奈……こんな奴に情けなどかけるな お前も襲われるかもしれないし」

「……………」

「さて……… 寝るか」

とにかく色々疲れたので寝る

香奈に被害が来ないといいんだけど………

第十一話 何で香奈を……（後書き）

何だか話の雰囲気がちよつと変わったような……
ま、いつか

第十二話
リボン！！

んゝ眠い…… あれ？ 恵美…… 何してるのかなあ
珍しく目覚ましが鳴る前に目を覚ます

「……………惠美？」

「あ、起きちゃった……寝てた方がやり易いの」

「何のことかな？」

「ほら、海と香奈は見分けがつかないでしょ？ だからこれを」
そう言って恵美が僕の目の前でヒラヒラさせているのは……リボ
ン！？

「これをつけろっていうの？」

「その方が可愛いしね」

「い・や・だ!! 絶対つけないからね!!」

「そっか……」

仕方ない……というように恵美が俯く

「じゃあ力づくで……ね♪」

「え……恵美？」

「こうでもしないとつけてくれないからね♪」

そう言ってギリギリと僕を追い込む

「や……やめろおおおおおー！……！！！！！！！！」

「う」

「海、そんなに落ち込まない！！ 香奈も泣かないの！！」

「誰のせいでこうなってると思っているんだ!!」

僕には水色、香奈にはピンクのリボンが髪につけられていた
そのリボンを使ってツインテールにさせられている

しかも取ろうとしても母さんが魔力を込めて作った物らしく、取る
ことができない

本人以外が取ろうとしても無理らしい

随分とたちの悪い物を作ってくれたもんだ!!

「学校の中だけならまだしも外に出かける時も取れないなんて……
…屈辱だ!!」

「そこまで言わなくてもいいでしょ　ほら、今までより可愛くなっ
たよ」

「ははは………　それは僕にとって谷底に突き落としておいてさらに
10メートル一緒に落としてくるのと同じような言葉なんだ
けどな」

「何か凄い具体的な表現ね…」

「またクラスに入った時に襲われたらどうしよう……　しかも今回
は香奈まで被害が……」

「海も魔法少しは上達したから何とかなるんじゃない？」

「まあちよっと訓練してそりゃ思い通りに使うことはできるように
なったけど…」

「ならなんとかなるでしょ」

「他人ひとごとだと思っって……!!」

~~~~~教室前~~~~~

あゝ　何だか昨日と似たような展開……

ガラ

「……やっぱりな」

「海兄ちゃん……怖いよお」

何から何まで昨日と同じ　ただ違うのは香奈がいるということだけだ  
どうやらもう香奈が来ているということとはわかっていいるらしく、驚  
いている人はいない

「…………行くぞ」

香奈にそう言って廊下に飛び出す  
当然後ろから来るのがいる　全く同じ展開だな

~~~~~3分後~~~~~

「つくそ!!　追い詰められた」

「どうしょ」

今にも飛び掛ってきそうだ

ついに一斉に……来た!!

そこで何かが盛大な音を立てて切れる

「てめえら……………いい加減にしやがれ!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

気づいたら目の前には今まで追ってきた変態共が倒れていた

~~~~~香奈視点~~~~~  
~~~~~

あ…………

海兄ちゃんが……切れた

こうなったら大変なことになるよ……　あの人たち大丈夫かな?

「てめえら……………いい加減にしやがれ!!!!!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!!!!!」

うわ…………　目つきが凄いことになってる

怖い…………

そうすると、海兄ちゃんはいきなりぼんやりとした球体を創りだした

そう……まるでガラスのような
不思議な球体がだんだん大きくなっていく

追いかけてきた人たちは驚いて立ちすくんでいる

「……………死ね!!」

そう言うと同時に海兄ちゃんは球体を飛ばす

バチィ!!!!

激しい音がすると同時に僕と海兄ちゃん以外の人は倒れていった

~~~~~

「海兄ちゃん凄いよ!! それ何の魔法なの？」

「……………へ？」

「今やった魔法だよ」

……………？ 何のことだ？

もしかして切れている間のことか

昔っから本気で切れるとその間のことは覚えてないんだよね……

なるべく覚えているように振舞っていたんだけど…… 香奈まで騙  
されていたとはな

「ごめん……昔から僕って本気で切れた時のことは覚えてないんだ」

「え？ 今まで覚えていって……」

「それは切れると見境が無いように思われない為に言っていた嘘だ  
香奈も騙されていたとは思わなかった……」

「そう……なんだ」

数分間沈黙が包み込む

「教室……行こっか」

香奈に言う

「でもその前に……この人たち……保健室に連れて行った方がいいんじゃない？」

「それもそうだね」

気絶している変態共を網に包んで引きずっていく

「海兄ちゃん？ その網は……」

「ん？ ああこれか 隣町で買った物に魔力を注いだ物だ 少しは強度が上がっている」

「それ以前に何でそんなの買うかな？」

「んゝ何となく」

「はぁ………」

溜息をつかれた

「ちよつと……その溜息は何？」

「いや………何でもないよ」

「いやいや………何でもないっしょ」

「？ まあいいや ここが保健室らしい」

「やっぱりここも大きいね」

香奈の言うとおりに、保健室もかなり大きかった

とりあえずのびている馬鹿共をぶち込んでおく

後は保健室の先生が何とかしてくれるだろ

「さて………行こう！！」

そう言って僕は走り出す

「あ………待ってよ」

香奈も少し遅れてついて来る

今日も朝から慌しい………

### 第十三話 調理実習で大パニック

「終わったー!!」

ようやく今日の授業が終わる

因みにさっきの馬鹿共は今日一日意識が戻らないっぽい

……あんま信じられないけど僕が放ったのって無属性の魔法らしいし

「海兄ちゃん!! 授業は終わったけど先生はまだ話してるから聞いたほうがいいと思うよ」

隣の席に座ることになった香奈が耳打ちする

「ああわかったよ……」

「ということで、明日調理実習をするから少し練習でもしとけ」

調理実習~~~~~!?

しかも黒板には勝手に決められたメンバーが

えっと僕の班は………

宮野恵美

佐山祐樹

白川海菜

白川香奈

………

いつものメンバーじゃないですか~~~~~!!!!!!

「では……解散!!」  
「っておい!!」

全く話聞いてなかったんですけど!?

とりあえず香奈に調理実習のことを聞く  
実習では野菜炒めに卵焼き、カレーってどういう組み合わせだあゝ  
~~~~~!!!!!!

「……………香奈？ この組み合わせ…………おかしくないか？」

「うん……………僕もそう思う」
「やっぱり香奈もそう思うか」

「まあでも……………」

「僕と香奈は料理下手ではないから……………寧ろ結構慣れてるし、練習なんてしなくても大丈夫だよな♪」

「だよね♪」

~~~~~調理実習当日~~~~~

「さて、作ろっか」

「うん!!」

僕と恵美は意気込んで料理を作ろうとする……………のだが

「恵美!! それ酢だよ」

「え？ サラダ油じゃないの!？」

恵美が野菜炒めに酢を大量に入れていきます

「って祐樹!! 卵焼きに砂糖全部入れてどうすんのよ!!」

今度は祐樹が卵焼きに……………

互いに超ありえないミスをしまくっている恵美と祐樹

「海兄ちゃん……………」

「ああ……………忘れていた」

この二人が超絶的な程の料理音痴だということを!!  
とりあえずこういう時の対処は……………

「はあ………はあ………これで……大丈夫だよな」

「うん……たぶん」

邪魔なので縛り付けておきました♪

「作り直し……だな」

そして目の前には未知の料理

味見してみたが、ありえない程に不味い。

「何とか間に合った〜〜〜〜!!!!」

「よかった」

頑張って二人で作ることができた

制限時間ぎりぎりだが

小学生時代から母さんが消えてしまったため、二人で料理していたという過去があるので僕も香奈も料理はなかなか上手い

「ほら、恵美！！祐樹！！できたよ」

二人の縄を解く

「つはあ！！  
何で縛り付けるのよ！！」

「邪魔だから」

僕と香奈が同時に言う

「何故猿轡まで使った!!」

「五月蠅そうだったから」

またまた見事に同時に言う

何だか騒いでるけど気にしない

物を投げてきたけど気にしない

殴ってくるけど気にしな……

ブチ

[illegible]

二人を殴り飛ばす

黒板にめり込んだけど気にしない

「さて……食うか」



僕と香奈は自分で作った料理を食べる

なかなか上出来だった

騒いでいたせいか妙に注目されていたけどね……………

因みに黒板にめり込んだ二人は後で食べたらしい

調理実習くらい普通にできないものか……………

### 第十三話 調理実習で大パニック（後書き）

今回は海菜と香奈は弄られませんでした  
何だかつまんない……………

やっぱり弄られキャラは遊ばれないとね♪

## 第十四話 罌!?

はぁ……………

転校してからまだ数日しかたっていないっていうのにここで生活で  
きる気力がないよ…

「海も行くよね?」

いきなり恵美が聞いてきた

……………は?

「もしかして海兄ちゃん……………聞いてなかったでしょ」

う…………… 凶星

結構痛いこと言ってくれるじゃないかコノヤロウ♪

「だから、校長よ!! 夜な夜な校舎を歩き回っては消えるって…  
…もう学園七不思議にも入っているのよ」

「ふうん……………で、それが?」

「はぁ……………ほんとに聞いてなかったのね…………… だから、つけてみ  
ようっていうわけよ」

何だかとっても嫌な予感がする…………… やめた方がいいと第六感が語  
りかけている

「……………やめた方がいいんじゃない?」

「何だよ!!」

「何でってほら……………ねえ?」

「僕もそう言おうとしてんだけどあまりにも真剣に話してる上に少  
し威嚇されてたからいえなかったんだよ……………」

香奈が恵美に聞こえないように話す

やっぱり香奈も同じように感じたのか……………

「大体後をつけるって…………… 下手したら殺られかねないぞ?」

ああ見えても母さんは一応世界で指折りの魔術師らしいし……………

「じゃあ私と香奈と祐樹だけで行くわよ!!」

「いや……香奈にそんな危険なことをさせなくても……」

「じゃあ海も一緒に来ればいいことでしょ？」

「う……………」

どうやら恵美に反論しなかった香奈はもう行くことに決定してるらしい

「わかったよ!! 行けばいいんでしょ!!」

……やられたよ

つくそ!!

言ってから少し後悔する

「じゃあ今日の夜10時決行ね!!」

結局押し切られたよ…………

因みに祐樹は色々あってね………… 倒れているから話に参加していない

あいつのありえない程の回復力だったらそろそろ起きてもいい頃なんだけど……

あ、起きた

「はあ………… 最近俺の扱い酷くないか？」

「五月蠅い黙れ!!」

もう一回気絶させておく

「海兄ちゃん……やっぱ流石に可哀そうだよ……」

「いや…… まだ足りないくらいだ それに不死身並みの回復力があるこいつなら大丈夫だ」

現に無属性の魔法やられても昼にはとくに復活してたし……

「あいつは放つといてもう寝よう 10時からだけど深夜まで続き  
そうな予感がする」

因みに僕の深夜は12時以降のことを言う

「………… そうだね」

僕と香奈はベットに入る

いつの間にか、寝てしまった

「……兄……ん………て」  
眠い……… 誰？

「海兄ちゃん！！起きて！！」

香奈の声がしてはっと目覚める

「よかった…… もう9時55分だよ」

時計を見る…… 針は香奈の言うとおり9時55分を指していた  
とりあえず部屋を出る

そこには恵美と祐樹が待ち構えていた

「お 海 ようやく起きたか」

「海菜遅いよ」

「ごめん………ってまだ10時じゃないんだからいいじゃん！！」

「じゃ、行くか」

無視かよ

~~~~~校長室付近~~~~~

「………なあ」

「「「？」」」」

「何で校長室なんだ？ 校長の寝室の方が……」

「ああ…… 校長室と寝室はつながっている」
「どういう造りなんだよ！！」

「なんかそれ………変………だよね」

まあ当然そう思うだろうな

「！！ 校長が来たよ！！」

恵美がそう言うと同時に母さんが校長室から出てきた
その後を静かにつけていく

全く母さんは気づいていないようだ（のように見える）

丁度10回ほど廊下を曲がった時、行き止まりで母さんが………消
えた！？

「まさかここに……………」

「恐らく秘密通路があるわね」

そう言っって壁や床を調べまくる恵美

「あつた！！　ここから行けるみたい」

恵美がそう言っって壁を押すと、壁が回転扉のように回つた

「なるほど…………　こういうしかけだったわけか」

祐樹…………　納得してる暇があつたらとつと行きましようよ
隠し扉の先には狭い通路があり、一列に並んで行く

進んでいくと、いきなり広い部屋に出る

「ここは……………」

「研究室…………　みたいだね」

そこには夥しい数の機械や資料等が並んでいた

「やつと来たわね」

……………へ？

母さんが僕の方を向いて言つた

「はい　連れてきましたよ」

え……………恵美！？

「これはどういうことだ？」

「校長に言われたんだよ　海菜と香奈を連れて来いってね」
つてことは……………

「「はめられた!？」」

「……………母さん　どうするつもり？」

「新しい薬の実験よ♪」

人体実験ですか……………

「何で香奈まで連れて来させたんだ!!」

「二人の方が性格なデータが取れるからね♪」

母さん…………　目がやばいつて

何だかマッドサイエンティストみたいだよ？

香奈と祐樹が飛び掛る

死に物狂いで僕は抵抗した

完璧に女になっていた僕だった

「起きた〜?」

「恵美い〜〜〜〜〜!!!!!!」

泣きながら恵美に魔法で攻撃

「ちよっと!!!!いきなり何すんのよ!!!!」

「この状態で怒らない人の方がおかしい!!!!」

「大丈夫よ あの手はせいぜい24時間しか効果がないから
24時間って……………」

「それでも十分長いわぁー!!!!!!」

せいぜい2、3時間くらいにしろよ!!!!

因みに声と顔、身長等は変わっていなかった

まあこれ以上声や身長が変わったらやばいよな

声だったら人間の高さじゃないし

身長なんて子供だ

顔も元々こんなもんだっただろう

「くそ!!! 僕と香奈で遊びやがって!!!」

冗談じゃないよ!!! こんなの

ただ……一つ安全策がある

「今日一日部屋にこもってしよう」

「そうはさせないよ」

……………こういう奴だったよ…………… そうだった

結局、僕と香奈は教室で一日見せ物にさせられたのであった

第十四話 畏！？（後書き）

香奈の気が弱いつて言うのがあんまり現れている所が無いような……
次回からはそうできるといいんですけど……ね

第十五話 メイド喫茶！？

「はぁ……………昨日は酷い目にあったよ」

薬の効果が切れて一安心

「でももしあのまんまだったら……」

「考えたくないね」

「……………うん」

大体いきなり薬飲ませるって酷いだろ（泣

疲れがたまっていたので寝る

昨日はちゃんと直るか心配で寝れなかったのだ

24時間とか言っておきながら実は30時間だったし……

「……………僕達の存在って……」

香奈の嘆きが聞こえたような気がした

異変に気づいて目を開ける

そこには恵美と……………見慣れない天井が映っていた

「……………おい」

「あ 何だ起きちゃったの？」

「の？じゃなくて……………ここはどこだ そして今僕に着せようとしている物は何だ！！」

恵美の手にはある服が握られていた

「これ？ 当然メイド服よ♪」

「てめ……………いい加減にしろよ！！ 僕がどれだけ恵美達のせいで……………」

「つておいしいー！ー！ー！ー！ー！」

「はあ……危ねえ」

「ったく!!こいつわあ~~~~!!!!」

横にあるベットには香奈が眠っている……

まあ抵抗する僕の方を先にやろうって魂胆だったんだろ

そう言った瞬間後ろからある気配があることに気づく

麻酔針を刺されて気絶する

.....

香奈、既に放心状態

「で、今度は何なんだ」

「本人の許可無しにですか」

「大体いきなり拉致するのはおかしいだろ!! 僕を何だと思って

「娘」

「僕は男だ！！何処が娘なんだよ！！」

「口論してる場合じゃないでしょ!!」とにかく今日は働いてよね」

「恵美が働けばいいじゃんよ!!」

「海の方が人気あるでしょ!!!」

いつ人気投票をした……………

[illegible]

僕と香奈は恵美と母さんに引きずられていく

「ちよつと……行く前にここが何処なのかくらい教えてくれたっていいだろ!!」

「何言ってるのよ　もうわかるでしょ？」

まあ着せられている衣装からしてここは恐らく……

「メイド喫茶よ♪」

やつぱりいゝゝゝゝゝゝゝ(泣)

店内に放り込まれる二人

うわあ～～～いるいる……

たくさんいるよ……

そして壁にはとつともなく気がかりな物が一つ

「ツンデレな姉と気弱な妹の双子の美少女メイド姉妹」

「つぎは、あなたよ……!!」

「誰がツンデレで美少女で姉でメイドだ……!!」

!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

「あの二人……いつか殺す」

「海兄ちゃん……怖い……」

ん？ ああ 香奈心が戻ったか……

完璧に放心してたからな

それより……

「海兄ちゃんって言うな　僕……じゃなくて……！　私が女装してるってバレルだろ　そしたら変態みたいじゃないか」

「……わかったよ海兄…… 海姉ちゃん♪」

流石に外で海兄ちゃんって呼び方はねえ……………

何せこの格好だし

一応自分も女言葉にしとく

気づけばこの前隣町に行った時もこうしておけばよかったな

やっぱりこのせいだったのかな 周りの視線が痛いように感じたのは……………

「ほら お客さん入ったよ!!」

店員さんが言った

「「い……………いらっしやいませ〜♪」」

つくそお!! 史上最悪の屈辱!!

「香奈……………今日一日の辛抱だ ある程度稼いだらきつと一日で大丈夫だろ」

その後、変なことを言っている奴らを全て気絶寸前の威力で殴っていた

そのせいか客の変態どもが一斉にツンデレコールしやがる

「……………まじで殺してやろうか……………?」

大量の殺気を放ったと同時にコールをやめる

どうやら修羅が見えたとか見えなかったとか……………

腹いせに客にさまざまな手口で特盛り定食(5000円)とジャンボパフェ(3000円)を注文させる

因みに両方ともあり得ないほどデカかった……………

少しスッキリした反面、悲しくなった僕であった

第十五話 メイド喫茶〜!? (後書き)

何だかとても痛い話に仕上がってしまいました…

実はだんだんネタが切れていて……どうしよう〜とか思ったりするわけです

一応これは海菜達が卒業するまでか一年間が終わるかした時に終わらせようかと…… このペースじゃあいったい何話までいくんでしようかね〜(汗)

第十六話 喫茶店での毒殺未遂事件

「で、どういふつもりだったんだ!!」

僕達は今、ある喫茶店にいる

と言つてもさっきいたあの忌々しい場所ではない

「だからあゝ 最近私の友人の店の稼ぎが悪くつゝ いい人材を探すように頼まれたのよ♪」

「そうですか いい人材を頼まれたら拉致するんですか」
非常識すぎるよ!! この母親は

「だってそうでもないかと海ちゃん言つてくれないでしょ?」

間延びした声だから更にウザい

「それはそうだけど、さ 無理やり連れて行くというのは人として間違えてるでしょ」

「私は人であつて人でないのよ」

まあ確かにその変態度は人を越してるだろうな
でも:

「そういう問題じゃないでしょうが!! 僕が言いたいのはいつまでそんなこと言ってるの? 女々しいわよ 海」女々しいとか女々しくないとか今はそんなのどうでもいいよ!!」

恵美、口を挟むな

「へえゝ 心までも女男に成り下がったのね」

その時、ブチ!! と何かが切れた音がしたような気がする

まあ何でそれで女男とか言われたいといけないのかわかんないが、
流石にそこまで言われて何もしないでいられるほど僕は心が広い訳ではない

僕は魔力を最大まで足に込めて回し蹴りを放った:はずだった

パシ

「なっ：！！！」

見事に恵美がその足を受け止めていた
何故できたかというと原因はただ一つ！！

「母さん：！！！」

リボンの力を使って魔力を封じたに違いない

「そこまで よ♪ 海ちゃん？ 女の子に手え出しちゃ駄目でしょ」
こいつは女であって女でないような気がするんだが

「海兄ちゃん： 流石に僕も蹴るのはどうかと思うよ？」

香奈：いつの間に復活したか

因みにこいつは今まで机に突っ伏して寝ていた
恐らく過労のせいだろうな

「ちっ！ わかったよ」

香奈にまで言われたのでは仕方が無い

「ちよっとトイレ行って来る」

「私も」

恵美と母さんが席を立った

「こいつらわく： 散々僕をこけにして…」

「海兄ちゃん！！ 落ち着いて」

確かにそうしたいのは山々なんだよ？ でも：

「こんなことされて落ち着けるかああ！！！」

「どうしよう：海兄ちゃんが壊れちゃった」

っておい 香奈あ！！

「壊れてねえええ！！！」

「ああ：更に重症に「いい加減にしろ！！」 なってなかったよ
かった♪」

ったく どいつもこいつも：

何だか周りの視線が痛い

香奈の『兄ちゃん』の言葉と恵美の女男で女装だと気づかれたか？
しかもさっきから怒鳴ってて注目を浴びているし
でも今はそんなこと気にしている場合じゃない

「さて、と」

「？」

今やるべきことは……

ポチヤン

「!」
「?」

僕は香奈と母さん、そして祐樹のコップにある物を入れた因みに祐樹は今料理を頼んだ後すぐにトイレに直行しているどさくさに紛れてかなり効く下剤を飲ませたから当然だろうな「海兄ちゃん？今何を入れたの？」

香奈：それはね

「血糖降下剤」

「ええええええ！？」

※血糖降下剤とは糖尿病患者が服用する薬である

しかし、通常の人が摂取すると血糖値が大幅に下がってその状態が長く続けば最悪死に至るととても強力な薬物だ

(名探偵コロンより)

「いいの？　そんなの入れちゃって」

「大丈夫 最悪死ぬだけだから」

「死ぬだけって 死んだら駄目じゃん!!」

「
い
い
の
い
い
の」

あの三人だし

殺しても神様は許してくれるだろう
 というか寧ろ正当防衛だな

そんなこんなで三人が帰ってきて

ゴク

全員水を…飲んだ…!!

「はぁ… 水がおいしい」

「何だか薬臭いような気がするんだけど」

「気のせいでしょ」

これでこいつらは逝ってくれる

…10分後…

「ここの料理おいしいわね」

「ほんと、待ったかいがあったよ」

「あれ？ 食べないの？ 海菜」

何で効いてないの…!!?

「海兄ちゃん…」

香奈が震えている

まあその気持ち、わかるよ こんな薬飲んでピンピンしてるんだぞ

!?

「こいつら…化け物か？」

「人間じゃない…」

普通はもうとくに症状が表れて倒れてるはずなのに…

「この様子だとトリカブトも青酸カリも駄目か…」

一度は考えた完全犯罪の計画も空しく散ってしまった瞬間であった

第十六話 喫茶店での毒殺未遂事件（後書き）

なんだかとってもダークな内容になってしまいました…
とりあえずすいません

第十七話 やっぱり恵美は酷い！

「海！！待ちなさいよ！！」

後ろから恵美に母さん、祐樹に他多数が追いかけてくる
まあこの状況を見ればすぐにわかるだろう
僕は…こいつらから逃げています

事の発端は数分前

「…もっと収入元が必要かな」

恵美がぽつりと呟いた

「へ？」

「よし！！　ということで海！！　協力しなさい」

何で命令口調？

というか何に協力するの？

「な、何に協力させるの？」

「じゃあ宜しくねえ♪」

何だか寒気がしてくる

恵美の手には怪しい紙袋が握られているし…

「いやだから今度は何をさせ　っ！！」

じりじりと近づいてきて残り10mにさしかかった時に恵美がいきなり速度を上げる

とってもやばそうな雰囲気なのでとりあえず…

「…逃げよう」

そう呟いて恵美と反対方向に猛ダッシュする

とこうして今に至るわけであります

はい　いつものことながら疲れますねえ
人数が増えているのも気にならなくなってきた
これもいつものことだし（苦笑）

その時、ある言葉が頭を過ぎる

：逃げ切ってもどうすんだろ

というか寧ろ逃げるのは無駄かもしれない

いつかは捕まるだろうし

「：今はそんなの気にしている場合じゃないよな」

僕は走る速度を少し上げる

狂気に満ちた眼をした多数の変態がそれに合わせて追ってくる

一応もうここに入学してから一ヶ月

この学校の配置はもう完璧に覚えたつもりだ

どうでもいいけど：

「作者いきなり時間流しすぎだろ！！」

何故か作者にいらないつつこみを入れる僕

なんてやってる場合じゃなくなってきたな：

無駄な回想や作者へのつつこみを入れている時にいつの間にか僕の
進行方向からも人が来てる

つまり：

「挟み撃ちかよお…」

咄嗟に右側に通路を見つけた

「ここは行き止まりか？それとも：　：そんなの考えている時間は
無おくいな」

もう服が& a m p; # 2 5 6 8 1; まれそうだ

しかしその直前で階段のほうに逃げた為に二つの人の波は激突する
これで外へ抜け出すことができる道なら逃げるができるのだが：

「：よかった　今回は普通の道だ」

賭けは僕の勝ちに終わった

丁度その道は今いる場所から外に出るまでの最短ルートだった

そして最後の角を曲がった時、ある意外な人物が待ち構えていた

「…香奈？」

「ごめんね…海兄ちゃん」

って何をいきなり言ってるの？

「…ごめん！！！！！！！！！！」

その瞬間、香奈が隠し持っていた麻醉銃の引き金を引いた

「！？ 香奈！？…何を…」

僕の記憶はここでブラックアウトした

「ん…ここ…は？」

目を覚ました時には僕はベットに横たわっていた
見慣れた天井… 自室か…

「全く 僕も酷い扱いをされたもんだな」

そう言っ僕は苦笑した

「それよりも…」

恵美が何をしたかったのか、寝ている間に何をしたのかが一番の問題だ

まず自分の着ている服をチェック

まあいつもどおりの服装だな

…これを着て出歩くということに羞恥心を感じなくなってきた
のはとっても問題と思うのだが

次に周りをチェック

何だか色々な服が…散らばってるよお

それも中には相当恥ずかしいような物も…

つまり…だ

「僕はこれを着せられてたのお!？」

しかも収入元が必要と呟いてたな 恵美は
…と、いうことはだよ

これを着た僕の写真を…

「売るつもりかい！！！！！！！！！！」

絶対阻止しなければ

とにかく今すぐ恵美を止めに…！！

目の前の扉を開く

何故かいつもこの時に恵美が…

「やっぱりいたあ！！」

呑気にお茶してるよこいつ…

「お 海い！！ 大分稼げたよ！」

ほうそうかいそうかい稼げたのかい

「もう売ったんだ…」

怒る気力も無くなってきたよ

「やっぱ売れるねえ 海の写真は♪」

笑顔で話す恵美

「もう…好きにして」

「海兄ちゃん そこまで落ち込まなくても」

香奈あ！！

今まで同じような思いをしてきてるから僕の気持ちはわかるはずな
んだけどなあ

それはそうと、だ

「何で香奈はさっき僕に麻醉銃を撃ち込んだのかなあ？」

「恵美ちゃんに言われたんだよ… 『協力しないと香奈をやる』 っ

て…」

自己防衛か…

まあそれならしょうがないかな

「…何で恵美はわざわざ香奈に協力させたのかな？ 香奈の方が抵

抗しないし楽なような気がするんだけど…」

まあ香奈に被害が無いからよかったあ…とか思ってる自分もいるわ

けなんだけどね

「香奈にやると何だか罪悪感を感じるしそれに…」

「それに？」

「海の方が反応が面白いから」

「酷お!!!」

まあでも香奈に罪悪感を感じるのは無理ないな

ひたすら泣くからな…あいつは

それでちゃんと罪悪感を感じるんだから恵美も良いところは無くはないのかな？

「じゃあこれから写真撮らせてね 海♪」

前言撤回

やっぱりこの人酷いよ

これだけ落ち込んでいる僕にそんなこと言うか？普通は

「い・や・だ!! もう二度とあんなことするなよ!!」

「ええー せっかく売上金あげようと思ってたのに」

「そんな金でつられるほど性根は腐っちゃいないよ 僕は」

「ま、いっか 抵抗するのを無理やりやらせる方が面白いし」

つまりそれは凹んでいる僕を見たいということでしょうか？

最っ低だな こいつわ

「そうだ 渡して無かったね」

「何を？」

「この前のバイト代 3か月分の稼ぎだったってよ」

って遅お!!!!!!

「もう何日たってると思ってんだ あの時は4月20日で今は5月10日だぞ？」

「ん？忘れてた」

おいしい!!!!!!

ここ数日金不足でちよつと困ってたんだぞ

母さんに話すと見返りに何させられるかわかんないし…

「何よその顔？ いらないんならもらっとくけど」

「いや：ありがたくいただいておきます！！」
流石にこれ以上この状態は不味いからなあゝ
バイト代を受け取って机に項垂れる
僕はそのまま深い眠りについた

第十七話 やっぱり恵美は酷い！（後書き）

大分日時がぶつとびましたねえ（笑）

早く夏休みに突入させたいです

第十八話 悪魔襲来！（前書き）

ここからは作者のナレーションでお送りします

第十八話 悪魔襲来!

「担任が代わる？」

廊下を歩きながら一人の少女：もとい、少年が声を上げた男なのに、どう考えても女の子にしか見えない顔だ

頭には水色のリボンをつけている 当然こんなのをしている人はこの学校で海菜しかない

「うん、何だかこの学校をやめるみたい」

「：マジ？　　というかこの時期にやめる人っているか？」

「疲れたんだとよ」

「名前まで出たのに全然出番なかったね　あの先生」

上から順に恵美、海菜、祐樹、香奈である

「もう読者にも忘れ去られているだろうしいんじゃねえの？」

「祐樹、そこまで言ったら流石に可哀そうだろう　まあ確かにそうだけ」

「祐樹も最近海に殴られることしか出番無いけどね」

最近作者にまで出るのが面倒がられている祐樹であった

「で、」

散々祐樹を罵った後、海菜が一つ疑問を言う

「まさか担任がいなくなるってことはないだろ？　新しく誰か入って来んの？」

「それがね、何と新しい教師は：」

「誰？　　まあ教師だけは普通の学校だから新しく入るのも普通だ：と思うけど」

事実生徒で普通な人はいないし、校長も変だから当然海菜も例外では無いのだが

「だけって何よ　で、その教師っていうのは」

恵美はそう言って周りを見渡す

「そうそう、あの人！」

恵美が指差した先にいたのは、顔の整った綺麗な女性だった
年齢は21歳程度だろう

その人物は海菜のよく知っている人

そして海菜が恐怖している人の中で1，2を争う人物だった

「ちょっと 何で逃げようとしてるのよ」

後ずさりしている海菜を恵美が止める

「海兄：あれってたぶん」

「ああ：あいつだな …… あるいは何で僕の呼び方が変わってるんだ？」

「ん？ こっちの方が言いやすいから」

（じゃあ最初からそうしとけよ！！）

と、心の中でつつこんでいた海菜だった

「う・み・な♪」

「！」

いつの間にかその人物は海菜の目の前に現れていた

陸上選手もビックリのタイムだ

「姉さん…？」 「鈴姉…？」

海菜と香奈が同時に言う

その人物は海菜と香奈の姉、鈴菜すずなだった

因みにこの姉弟の全員の名前に『菜』がついているのは名付け親で

ある白川城菜しろかわしろなが子供全員に自分と共通させた文字を一つつけたとい

う願望のためだった

「「へ！？」」

残りの二人は驚いてすつとんきような声を上げていた

祐樹はまだしも恵美までも驚いているのは変じゃないかと思うだろう

しかし、実際は恵美は彼女の存在は知っていても外見は知らないのだ
これだけ海菜、香奈と長い付き合いをしているのに会ったことが無

いのは不思議だが、それは鈴菜が城菜と同じくらいの時に一人暮らしを始めたから
それともう一つ

鈴菜がプロ顔負けの技術があるためだった
事実、足音を消すくらいなら簡単だし、変装もお手の物 尾行さえ
もかなりのものというものだから驚きだ（こんな無駄なことを身につけている方が驚きかもしれない）

そしてこの人の趣味こそが海菜の最も恐れていること

「今日から担任になるからヨロシクねえ♪ これでゆっくり海菜で遊べるな」

海菜虐めである

その一言を言い残すと、鈴菜は颯爽と廊下を去っていった
そこには呆然と立っている三人と、脅えながら震えている一人が取り残された

「終わった…」

自室に戻った海菜は呆然と空を見ながら呟いた

「海い 何でそんなに落ち込んでるのよ 別にあんたの姉が来たところで大したことは「恵美、昔あった弁当事件のこと忘れてないよな？」…あるわね」

「…なあ」

「「何？」」

「弁当事件って何だ？」

この中で弁当事件のことを知らないのは祐樹だけ
故に全く話の内容がわからない

「…あれは僕がまだ小学2年の時の話だった」

海菜が話を始めた

「あの時は学年でピクニックみたいなものに行っていた とても

平和だった…昼になるまでは…

遊びも終わって弁当を食おうとした時だ 何と弁当の中にゲジゲジやミミズが大量に入ってるんだ」

今思い出しても恐ろしいと言うように話す海菜

「…確かにそれは怖いな もし気づかずに口に入れたら虫を食うことになるからな」

「ああ…あの後は数日ろくに食べ物を取れなかったよ」

「それは大変だったこと」

祐樹は、ご愁傷様とでも言うように哀れみの念を送りつつつけていた

「それに海兄、あの後虫嫌いになったしね」

「香奈あ 何でそういう事を言うかな？」

「楽しいから」

「…」

香奈の発言に静まり返る室内

(香奈にまで僕虐めの傾向がうつったのか?)

ドガァ!

「「「「!!」」」」

突然、扉が吹っ飛んだ

「やっぱりいたあ」

使い物にならなくなった扉の向こうから表れたのは…

「姉さん!?!」

鈴菜だった

「いきなり なっ!!」

海菜が言葉を発している最中に鈴菜は海菜を掻っ攫っていった
再び室内は沈黙する

「何だったんだろうな」

「さあ? 幻覚じゃない?」

「きつと気のせいだよね」

少し現実逃避していた三人であつた

第十八話 悪魔襲来！（後書き）

大幅に更新遅れました…

ようやく出したいキャラは全て出し切りました

…城菜（海菜母）の名前出すの遅すぎましたね（汗

第十九話 絶望の日々（前書き）

やっぱり元に戻そうと思います
すいません…こんなに気まぐれで

第十九話 絶望の日々

「おかえり」

三人の声がハモる。

僕が部屋に入るといきなりその声が聞こえた。

「おかえり。じゃないよ！ 僕はかなり大変だったんだから！」

ほんと、あれは地獄なんてもんじゃない。寧ろ地獄なんてあれに比べたらずっとましだと思う。

「で、結局何をされたわけ？」

いきなり核心をついてくるな……。普通人が思い出したくないことを言わせるか？

まあそれはさておき、されたことはというますとですね。

「虫攻め……」

「虫！？」

ほんとに怖かったよ。だって蛾やゴキブリがたくさん狭い室内に放たれるんだよ？ 失神するところだった……。

というより失神する寸前で止められてしばらくたって再開という生き地獄。

数分の沈黙の時間が流れる。

三人共に、僕に哀れみの目を向けてくる。

「ご愁傷様」

ぽつりと香奈が呟く。

ご愁傷様で片付けられることじゃないんだけどね。

「さすがあの人の娘だな」

祐樹？ 言っておきますが僕は彼女の息子ですよ？

何で僕だけがこうなるのかわからないよ。

「あゝこれから何度もあんな目に遭うと思うともう耐えられないよ……。いつその事死んだ方がマシだ！！」

「そんな事言わないの。それ以前に私達がそうはさせないし」
恵美の言葉に僕はまた絶望する。
もうほんとにどうしようもない。

「でも何とか大丈夫そうだな。ま、それくらいで落ち込むな」
最近僕ってよくキレるんですよね。
ただじゃすまさないよ？祐樹クン♪

その後、祐樹は窓から突き落とされ、さらに爆炎が彼を襲った。
勿論全て僕の仕業である

第十九話 絶望の日々（後書き）

とっても遅くなりました

どうもネタが思いつかなくて…（汗）

すいません…

できればクリスマス編とか書きたかったけどもう過ぎてしまいましたがね（笑）

題二十話 夢

「私と一緒にいこう」

何で？

「貴方には特別な能力があるの？
どんな？」

「来てくれればわかる。そして私はそれを教えてあげる」
俺をどうするつもりだ？

「私は貴方の能力を発揮させたいだけ」
それを利用する気か。

「ふふふ…… なかなか鋭いわね。」
はあ…… で、俺は何をすればいい？

「私の言う通りにするだけよ。 他は自由にすればいい」
わかった。あんたの言う通りにする。ただ、それなりの事はしてもらうぞ。

「交渉成立ね。じゃあ行きましょうか」

ああ。その前に、あいつには何て言っておくか？

「その辺は私が何とかしておいてあげる。心配しないで」
そうか。じゃあ安心してついていけるな。

~~~~~

目を開ける。すると白い天井 いや、正しくはベッドの下部分が映し出されていた。

夢……？ それにしてもはっきりしていた。

何故か母さんとあいつがいて、何か話しているみたいだった。そして、二人で何処かへ歩いてく 二人が見えなくなつて――

「海菜ー！！」

爆音とともに入ってきた。僕はソレを思いっきり殴り飛ばす。そして倒れこんだソレを踏み潰した。悲鳴を上げたがそんな事気にし

ない。そして、関節技を使った。

「毎回毎回よくこんなことをするな。変態」

「ちょっと、痛い！謝りますから許して！！」

「このまま腕を切り落としてやろうか？」

「海菜？何かキアラ変わってるよ？」

僕は舌打ちをすると、モヤモヤした気持ちのままいつものように身支度を済ませた。

何なんだろう？ あれは。何で今頃になってあいつの夢なんて見たんだろう。どうもスッキリしないな……。

小説とかだとこんな時にその本人と出会ったりするけどまさかそんな事無いよね。

「海？何ぼーつとしてるの？」

いきなり、声が聞こえてきたので、僕は我に返った。

「ん？いやちょっとね」

「ふゝゝん」

疑り深い目から逃げ出すために、僕はその場から逃げ出す事にした。

少し校内を歩き回ってみた。仕掛けがないかどうかとか見取り図の完成も兼ねて。無論、いつでも逃げられるようにね。

丁度校長室にさしかかった頃、声が聞こえた。

「何でそう無計画に物事を進めようとするんですか！？その度に私が迷惑しているんですよ？」

声の様子からして女性のようだ。どうやら何か言い争っている。少ししてから、一人の男が出てきた。勿論、この学校の制服を着ている。恐らく、さっきの声の人はこの中にいる。そして、校長にあとまで講義ができるのは生徒会長くらいだろう。今は女子が会長、男子が副会長をしているというし。となるとさっきの人は副会長かな？

うん、最近鈍っていると思われていた状況判断も大丈夫だ。  
そんな事を考えた後、パンを買ってから部屋に戻った。

「で、どうしてなの？」

そしてそこには恵美が待ち構えていた。そこまで追求する必要もないし、たいした事じゃないのに何でこんなにも執着するのか。

「そこまで大して事じゃないんだけど、変な夢を見てね」

「ふう〜ん。で、どんな？」

「アイツ…… 凧が母さんと何かを話していた」

「そう」

それを聞いて、安心したのかそれともすっきりしたのか、笑顔で部屋から出て行った。いつもはここまで気にしないのに何でだろう？……今日は考えすぎか？何かおかしい。それとも感覚が戻ってきているのか？まあそこまで気にすることでもないけど。

そういえば香奈はまだ寝てるのかな？まだ見てないけど。

「ここにいるんだけど？」

「っ！？いたの？というか何で考えてることがわかった？読心術？」

香奈は普通に椅子に座っていた。

「うるさいなあ。どこか遠くを見つめていると思ったらいきなり我に帰って自分の部屋に入っていこうとするんだよ？普通わかる」  
なかなか鋭いことで。まあそりゃわかるけどね。

「全く。海兄らしくないよ？いつも何も考えてないか考えてるけど表に出さないかなのに」

「うん。自分でもそう思った。ちょっと考えすぎかもね」

「あえて何考えているのかとかは聞かないけどさ。しっかりしてよね」

「はいはい。わかってるって」

その後も、何だか調子がおかしかった。胸騒ぎがするというか……。どうもあの夢のことが頭から離れなくて。



## 題二十話 夢（後書き）

何だかちよつとシリアスっぽくなったような気がします

## 第二十一話 生徒会長と隠し事

丁度授業が終わり、自由時間に差し掛かっていた。

「あんた今日生徒会室に行つてね」

「……僕、何かしたっけ？」

何かやったっけな。まさか何度も授業をうけていないことか？ いや、でもそれは僕自身の意思でやってるわけではないから。じゃあ他に何かあるのだろうか？

「ああ。香奈も行くらしいよ」

「はあ？」

香奈もなかなか驚いているようだ。特に香奈なんて僕よりも危害は受けていないから呼び出される必要は無いと思うんだけど。

いや、それなら生徒指導室に呼び出されるはずだ。じゃあ何なんだろう？ 全くわからない。

「行ってみればわかるか」

ただ、最悪のパターンはそこで何らかの罠が待ち受けていること。僕はただそれが無いことをひたすら願いつけるしかない。

「いざとなったら自分の身は自分で守ってね」

香奈はまたそういう事を言うか。まあ確かに人の心配までできる状況ではないか。いくら香奈がここ最近魔法の特訓をしているとはいえ何とか恵美と祐樹を止められるくらいだ。まあ僕も覚醒（前の集団気絶事件のように）でもしなければそうなんだろうけれども。

不安を抱えたまま、僕たち2人は生徒会室へと向かうことにした。

「あ、まああんた等は大丈夫だと思うけど生徒会長は結構な男嫌いで、一度言い寄ってきた奴を半殺しにしたらしいから気をつけた方がいいと思うよ」

後ろからの声に、不安が広がり背中から冷や汗が流れる。どう考えても危険な人だと思うんだけど。

目的地まで重い足取りを進め、ようやく扉の前にたどり着くこと

ができた。

そして開けた先には一つの人影があった。綺麗な顔だ。これならば言い寄られるのも無理は無いと思う。彼女は、長い黒髪を鬱陶しそうに振り払い、こちらに気づいたらしく、声をかけた。

「ああ、ようやく来たね。じゃあそこに座って」

僕と香奈は、言われたとおりにたくさんある椅子のうちの一つに座った。

見た目はそんなに恐ろしい人ではなさそうだ。ただ、見た目に騙されてはいけない。現に母さんや恵美なんてやろうと思えばそんな雰囲気簡単に作り出すことができるから。

それよりもあの声は朝校長室で聞いた声。校長と言いつ争っていたのはこの人か。

「いきなり呼び出してごめん。ちょっと2人には頼みたい事があるって」

「何でしょうか？僕たちにできることなんて無いと思うんですが？」

「ちょっと文化祭のことだね。それと敬語じゃなくてもいいよ」  
そう言うと、彼女……。生徒会長は軽く笑って見せた。でも、それは作り笑いに見えた。まるで無理やり笑って見せたような、そんな笑み。ただ、その作り笑いはとても本物と近かったので普通の人には全くわからないだろう。何で僕がそれに気づいたのかというと、昔そんな奴がいたからだ。そして、その笑いはあいつと似ていた。夢の中に出てきたあいつ……。風に。

「でも何で文化祭？まだそんな時期じゃないでしょう？」

これは香奈の声。確かにそうだ、と思った。文化祭は通常秋にやる行事。それなのに何でその事を今？

「実はちよっと人手が足りなくて、2人をお願いしようという訳。通常は最終的に生徒会が何とかするんだけど会長と副会長以外は誰もいなければ参加しなくていいというおかしい校則だからね」

「ということは、会長と副会長しかいない？」

「そういうこと。毎年文化祭は結構大変だから早めに伝えておかないと困ると思って。何たってクラスが1つしかないから個人個人のクラスで飾り付けをするなんてことが無いし」

因みに1年、2年、3年というようにも分かれていない。どうやら春にテストをやって、それが受ければ卒業するというこれまたおかしくみ。もはや別の世界の学校といってもいいだろう。

そのためもあり、入学式など無く、また卒業式も無い。元々魔術師は少ないからそんなに一斉に入学しないらしい。だから僕や香奈も転校生として扱われた。

「じゃあ仕事の内容はどんなの？」

「飾りつけとか出費、売り上げの会計、文化祭の内容のアンケートとかよ」

これはどう考えてもめんどくさい。因みに全校生徒数は50人らしい。その全員にアンケートをしてしかもどれだけ金がかかるか計算をして売り上げも数えるとなるとやはり2人ではできないだろう。おまけに飾りつけもなかなかの重労働なので絶対に辛い。協力するべきか、それともしないべきか迷う。

「ああ、2人を呼んだのは校長から助っ人を呼ぶなら貴方たちにしてと言っていたからね。たぶん自分たちの息子だから一番信用できるんでしょ」

拒否不可能だ。これを拒否したら彼女はどうなるのだろうか。それに断ったとしても断ることができるかどうかも定かではない。

「別に自由だからどっちでもいいのよ？嫌だったら素直に嫌って言って」

「そういう事なら――」

「やります！」

僕が言っている途中に香奈がそう叫んだ。

「ありがとう。じゃあ貴方は？」

「僕も……やらせていただきます」

「2人とも、本当にありがとう」

そう言うと、彼女はまたあの笑みを浮かべた。でも、僕には少し残念そうに見えた。話はそれで終わりだというので出て行こうとした時、僕たちに見えないように小さなため息をついていたのは気のせいだろうか？何かを隠している。そんな気がした。

## 第二十一話 生徒会長と隠し事（後書き）

この学校の制度どう考えてもおかしいですよね W  
もう少しよく考えればよかったかも

## 第二十二話 親友

「あの時、何で断らなかったの？」

別に断ろうとしたわけではないんだけど、どう考えてもメリットはないただめんどくさいだけだろうから。

「あの人は何かを知っている。そしてそれを隠している」

「同感。それに最後の溜息、絶対に何かおかしい。そして何よりあの表情……くぜなき 凧とそっくり」

凧こと、久世凧。小学校の2年の頃に出会ってからずっと親友だった。ただ、中学に行く頃に父親が死んだ。元々母親がいなかった凧は、どこか他の所に引き取られた。丁度母さんが失踪したのと同じくらいの時期だ。もしあの夢が本当だったら、恐らく母さんが凧を引き取る、または連れ去ったのだろう。そうすればこの学校にいるということも全て結びつく。元々あいつは虐待を受けていた。そのせいもあり、いつの間にかどんな時でも笑うことはできなかった。泣くことも、どんなことも表情に表せなくなっていた。心から笑っているのも表情に自然と出ることはなかった。だから、表情を作ることにしていた。そのうち、他の人から見たら笑っていないくても作り笑いさえすれば本当に笑っていると思われる程表情を作ることがうまくなっていた。でも、何故か僕には凧の気持ちがわかっていた。香奈ですらわからないのに、何故か僕にはわかった。彼女は凧の時の感覚と全く同じだった。彼女を凧にすれば何もかも納得いく。

……そんなことないか。ありえないことだとはわかっていて。でもそうとしか考えられないし、そう考えれば全て辻褄が合う。ただ一つおかしいことがある。あいつは男だ。それに好んで女装などする訳も無い。でも、やっぱりあれは凧としか考えられない。

「ちよつとあの人に聞きたいことがある。香奈は先に部屋に戻って!!」

僕は、ひたすら走り続けた。彼女に会って聞くんだった。『貴方は何

者なのか、本当に凧なのか』と。

⌘

⌘

⌘

「ふう……」

最近はどうも振り回されてばっかだ。本当はこんなつもりじゃなかったのに。まあこんなことを考えていても仕方ないか。二人も帰ったようだしもう帰ろうかな？

そんなことを考えていると、勢いよくドアが開いた。

「すいません！ ちょっと聞きたいことが」

「何？」

そう言って、笑顔を作ってみた。

⌘

⌘

⌘

ドアを開けると、椅子から立ち上がって今帰ろうとしている彼女の姿があった。

「えっとー……あの、貴方は――」

「奈美でいいわ」

どうやら彼女、いや彼の名前のようだ。いや、偽名と言った方がいいか。

「えっと、奈美さん 聞きたいことがあります」

「敬語じゃなくていいって。で、何？」

「わかった。じゃあ本題に。貴方は……」

「凧なの？ いや、凧なんですよ！！」

「え？ 何のこと？」

「とぼけないですよ！！ もうばれてるんだよ！？ 隠してどうするの……！！」

すると、目の前の人は舌打をした。

「ハア……。やっぱりばれたか。そうだよ、海菜。俺は凧だ」



「やっぱりそうか。じゃあその格好は何？そして凧は何を知って」

「そんなに急くなって。ちゃんと話すから。とりあえず落ち着け」  
「ごめん」

つい興奮してしまった。いくら凧のこととはいえやりすぎたな。

「まず、城菜は大の男嫌いだ。これはわかるよな？」

今言っていたように、母さんは大の男嫌いだ。父さんも中性的な顔だし、僕や香奈をこうして育ててきたのもそれが原因だ。

「お前はここまで言えばわかると思うが、まあそのせいで俺はここまで女らしくさせられてしまったと。顔はいつの間にかこうなっていたし髪は切ることを許されなかった。この学校に入れと言われとも女子として入学させられるし」

恐らく母さんのことだ。顔は知らない間に整形させたか薬を使っ  
たな。

「そして俺の知っていること。それはお前、香奈、鈴菜、城菜。  
そして俺の能力だ」

「え？」

「能力は暴走したら大変だから気をつけろよ」

「いや、能力って??」

「驚くのも無理ないか。今まで誰にも聞かされてないんだし。お前の家系は特別な家系だ。それぞれに特別な力が与えられるらしい」

「で、何で凧にその能力が？」

「俺は城菜の伯父の孫だ」

「ええー!？」

つまり、僕と凧は親戚?ってことになるな。

「ここまで、だ」

「何で?ここまで来たのに」

「わざわざそんなことを話すのもめんどくさい。自分で見つけろ」  
「さっき話すって言ったよね？」

「言った。だけど何で俺がそこまでしないといけない?理由は無

いだろう」

「風いー!!」

「そう怒るなって。自分の力くらいは自分で理解した方がいいだろう?それに何より……」

「何より?」

「面白くない」

とりあえず殴ってみた。鈍い音が部屋に響き、風は床に倒れこんだ。

「痛ってー……。全く、魔力込めて本気で殴るなよ。感動の再会だろう?」

「今ので全部吹き飛んだよ」

「お前も随分凶暴になったな。昔なら『何それえ?』とか言っちゃよつとむくれるだけだったのに。つか血い出てるし」

顔を見ると、本当に口元から血が流れていた。

「知らない。自分で治療しな」

「お前本当に冷たくなったな」

「只単に機嫌が悪いだけだ!!」

「悪かったって。本当言えばこれ話したら城菜からの拷問があるから言えないだよ」

「……治療、するよ」

「ああ、頼む」

風は昔と全然変わってない。人をからかって面白がるけど、何故か憎めない。目は何処か悲しそうで、遠くを見つめている。全てにおいて、全く同じだった。

「何にやにやしてんだ?」

「ん? いや、風が帰って来たんだなあと思ってね」

その言葉を聞くと、風は笑い出した。つい僕も笑ってしまう。ここに風がいる。それが僕にとってとても嬉しく感じた。

## 第二十二話 親友（後書き）

因みに香奈と凧はまあまあ仲はいいけど海菜程では無いようです（笑）

## 第二十三話 口論（前書き）

今回から風視点も出てきます。

まあ海菜と風両方主人公というような形だと思ってください。

## 第二十三話 口論

目覚ましが鳴る。……煩い。

とりあえずこれを止めたらまた寝て――

「凧!! いつまで寝てんの!?!」

ドンドンというドアを叩く音と共に声がする。

俺は音がする方向へ向かい、ドアを開けるとそこにいたものの口を抑えて引きずり込んだ。

呻き声を出して暴れるソレ。ドアを閉めると開放した。

「っはあ……。いきなり何を!?!」

「ここで俺の名をあまり呼ぶな。一応女として通してるんだから、2人きりの時だけにしろ!」

「そこまで気にすることかな?」

「気にすることだよ! ばれたら俺はもう終わりだ」

「何で?」

「お前が外で女装がばれないようにしてるのと一緒にだ!?!」

「え? 何で知ってるの?」

「この俺が今まで何も行動してないでも思ったか? 能力が暴走しないように見張ってきたんだよ。つかわざわざ『私』なんて言つて、本当に女装にも磨きがかかってきたな。別に俺は今のままの口調でも全くばれなかったけど。寧ろボクっ子って結構萌えるとか言う人多いし」

「何が萌えるだよ。凧はいつからそっち系の思考になった? 大体凧だって僕と会ったときに『私』とか言ってたくせに。しかも偽名まで使つてさ。たぶん学校内でもそうしてるんでしょ? そっちの方が女装癖あるんじゃないの? つか見張ってるとかストーリーじゃないの?」

「俺はいつもはこういう口調だよ。あの口調を使ってたのはあの時と本格的にこの格好を使って悪事を働く時だけだ。お前の場合は

それだとすぐわかるだろうし。まあできればなかったら一番よかったんだがこういうことになったからな。ほんとにめんどくさいよ。まあそのおかげで普通に見張ることができるようになったがな。つか俺がせっかく好意で見張ってやってるのにストーカーとは何だよ。もし何かあったらどうすると思ってるんだ？最後に俺は使いたくてあんな偽名使ったんじゃない。そうしろと言われたからやったんだ。全く、本当に物分り悪いよな」

「やっぱり凧だって使ってるんじゃない。人のこと言えない、変態」……そうはつきり言われると物凄く痛い。

俺が軽いショックを受けて立ち直れなくなっていると、海菜は冷めた目で睨み、出て行ってしまった。

「俺、今回だけでもないけどものすごい被害受けるような気がする。しかも海菜に……」

俺の嘆きは誰にも届くことなく消え去っていった。

## 第二十三話 口論（後書き）

今回は妙に長いマシンガントークがあったので行数はかなり短いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6291c/>

---

MAGIC SCHOOL

2010年10月10日00時51分発行